

摂津市議会 文教上下水道常任委員会記録

令和6年3月8日（抜粋）

【質疑1：学力向上の取組み・習熟度別指導等について】

○松本暁彦委員

これまでの各委員の質疑もございまして、省略できるところは省略して、簡潔にやっていきます。

1番目、学力向上の取組です。これは、令和6年度当初予算主要事業一覧7ページに学力向上の取組があります。昨年の決算時、私の質疑にて、教育長は、学力課題に関して、伸びている小学生が中学校に入り、中学校でどんな授業をしていくのかが大事と言われました。具体的にどう取り組まれているのか、お聞かせください。

併せて、本市課題の学校外での学習時間確保について、どう改善しているのか、お聞かせください。

○松本学校教育課参事

それでは、1番目の学力向上に関わり、中学校の授業をどのようにしていくのかという御質問にお答えいたします。

まず、授業改善の方向といたしましては、学習指導要領に示されております主体的、対話的で深い学びに向けた改善ということで取り組んでまいります。具体的には、主体的という部分では、先生が一方向的にレクチャーするのではなく、生徒が自己選択、自己決定ができるような場面を設定する。そして、対話的という部分につきましては、自分自身との対話、教材との対話、そして友達、他者との対話という場面設定を考えた授業設計を行ってまいります。

また、習熟度及び個に応じた授業なども、実際に取り組んでいるものを継続して取り組んでまいりたいと考えております。

さらに、学校外での学習時間についてのお問いでございます。こちらにつきましては、まず市としましては、やはり摂津SUN SUN塾で学習機会を設けること、そして各学校の好事例を共有している例といたしましては、中学校の定期テストに合わせて、小学生にも家庭学習ウィークということで位置付けて、家庭学習の習慣を身に付けるという取組を継続的に進めてまいりたいと考えております。

○松本暁彦委員

1番目、学力向上の取組について、中学校での授業と、学校外での学習時間の確保についての改善については、御説明のとおり、一定理解をいたしま

した。

御答弁の中で習熟度別指導というお言葉もありました。私も習熟度別指導は、特に中学校で必要になると考えております。

例えば、偏差値上位校を受験する子と、そうでない高校を受験する子の、求められる学力は異なります。むしろ学力差自体は、それぞれの個性であり、否定するものではなく、個々の学力を認めた上で必要な授業・指導をして個々の学力を伸ばすことが大切であると考えます。決算時には、教育長も熱く受験生の体験について語っておられ、公教育で頑張っていきたいと答弁されております。

吹田市の中学校に通う子供を持っている方と話す機会がありました。3年生はもちろんのこと、2年生でも塾に通う子供の数が大変多いとお聞きしております。塾、すなわち、それが学校外の学習時間に反映してこようかと思えます。加えて、塾では学力別や個別指導での授業が一般的で、個の能力を伸ばしています。それと比較して、本市では決して塾通いは多くない現状があると感じております。地域性にもよりますけども、経済的な事情など様々な要因もあります。あくまでも塾というのは民であり、各家庭の判断です。

そういった本市の状況を踏まえ、公で本市の課題を克服するには、他市以上に学校において、個々の能力に寄り添った丁寧な指導しかないと考えます。それが習熟度別授業・指導です。実際に習熟度別指導・授業は、成績向上に貢献すると多く評価があります。ただ、実施に当たっても、なかなか中学校では課題が多いと認識しております。そこで、習熟度別指導の効果と中学校での実施における課題について、どう考えているのかお聞かせください。

○松本学校教育課参事

それでは、1番目の習熟度別事業について、中学校における効果と課題についての御質問にお答えいたします。

まず、効果といたしましては、学級集団を分割することから、きめ細かく一人一人の生徒の課題を見取ることができ、そのつまづきポイントについて、即時にフィードバックしやすくなるということが、一つ目の効果としてございます。また、指導の中で、子供たちの学び方の個性について気づきやすくなるという利点もございます。

例えば、じっくりと考えることで理解度が深まる生徒ですとか、見ることで理解度が深まる、聞くことで深まる等の、そうした学び方の個性に気づき、手だてを打ちやすくなるという効果がございます。

一方で、課題についてなのですけれども、やはり集団を分けることから、教員の数を確保しなければならないということがございます。そして、集団を分けて、それぞれ授業進度が非常に差がつくというのもいけないことですので、授業進度を合わせる工夫についても、一定、やっていかなければならないことになろうかと思えます。

そして、また、これは課題というか、注意点でございますが、やはり学ぶ

に当たってのプロセスに対する支援でございます。目標を下げることにならないよう注意はしなければならない、これも課題の部類になろうかと存じます。

○松本暁彦委員

学力向上の取組についてです。習熟度別指導の効果と中学校での課題等についてお聞きいたしました。これについては、某塾のCM、PRの中で、北野高校の9割が、うちの塾の塾生だというようなPRがあるんです。これを見て、一つ思うところは、学校での教育だけでは、公立高校に行けない実態がある。一番人気の高い高校だからというのはあるんですけど、それ以外に、千里高校だったり北千里高校、あるいは山田高校、そして摂津高校についても、一定、そういった影響はあると思っております。

その中で、本市の子供たちが行きたい高校に行く、なかなか塾も行けないような子もいる。地域性にもよりますが、そういった観点で、やはり公として、やるべきことをもっともっと進めていくべきだとは思っています。

その一つとして、習熟度別指導・授業を、しんどい学校こそ、優先的に取り組むべきと思います。授業の中で、やはり低いところになると、全体的に低くなってしまふ、引っ張られてしまふ傾向があるのは、これまでの議論でも分かるところです。本来やったらもっと伸ばせる子が伸びなくなってしまうことは、非常に残念なことで、そういうところを避けていけないといけません。

ぜひ、しっかりと習熟度別指導をどうすべきかは、もっともっと真摯に考え、公立学校の子供たち、摂津市の子供たちが、本当に志望した受験校に合格できるように、しっかりと努力をしていただきたい。習熟度別指導、そして授業等も研究されていくことを要望いたします。

【質疑2：非認知能力向上・コトモノ体験について】

○松本暁彦委員

2番目、非認知能力、子どもの体育の充実についてです。市政運営の基本方針では、「生きる力」を育むために、こどもたちにより丁寧に対応していくとのこと。この生きる力には、非認知能力の向上は欠かせません。いじめ問題でも、コミュニケーション力の弱さが影響している現状があり、中学校の授業を見させてもらった際にも、グループワークをしている生徒たちの間で、積極的に関わっている子とそうでない子の差は明らかに見て取れます。学力以上に、社会で生き抜くにはコミュニケーション力を養うことが重要と考えております。

また、決算時に担当課は、アフターコロナ対応として、コミュニケーションの機会を増やしていくことが大事と答弁されています。今、コミュニケーション力を向上させる認識で、教育委員会とは一致していると考えます。具体的にはどう増やしていくのか、どう取り組まれるのか、お聞かせください。

○松本学校教育課参事

続きまして、2番目の非認知能力についてでございます。コミュニケーション力をつけるために、具体的にどのようなことに取り組むのかというお問い合わせでございます。

こちらにつきましては、現在、全校的に子供が主役の学校づくりということを推進しているところでございます。その具体的な内容といたしましては、よりよい学校づくりをするに当たって、子供たちの話し合い活動、こちらに取り組んでいるところです。

主に国事業で取り組んでいる第五中学校の好事例を、全校区で共有して、普及してまいりたいと考えております。

○松本暁彦委員

2番目、非認知能力の向上についてです。コミュニケーションの機会を増やしていく、話の場等を増やしていくということと理解をいたしました。

答弁の中で、第五中学校区での取組を普及していくとおっしゃられました。第五中学校区の取組、その具体的内容、よかった点、そして、その他校区に少しでも早く普及する必要があると思うんです。その手だてはどう考えているのかお聞かせください。

○松本学校教育課参事

続きまして、2点目の第五中学校区の取組についての具体性でございます。こちらは、国事業の委託を受けて取り組んでおるものです。まず、取組の大枠といたしましては、従来、教員主導で行っていたものを子供に委ねて、子供が主役の学校づくりを行うというものでございます。

具体的には、小学校も中学校も取り組んだのは、まず、運動会・体育祭の種目を新しく自分たちで発案・企画したり、子供たち自身のアイデアで取り組んだこと。また、周年行事がたまたまあった学校におきましては、キャラクターを子供たち自身で募集して、その中から選んで決定したというようなエピソードもあります。

そして、第五中学校においては、生徒会がこれまで取り組んでいないことで、こんなことをやってみたいというアイデアを、この指とまれプロジェクトということで、全校生徒に、こんなことを何月何日にやるんで、やりたい人、集まってくださいというような、子供たち自身が自ら発案して取り組む行事などが報告されております。

それらを普及する手だてですけれども、本市においては、小・中学校15校に魅力ある学校づくり担当者を設定しております。その担当者連絡会を定期的で開催し、そうした第五中学校の事例を第五中学校と鳥飼小学校、鳥飼東小学校の担当者から発表していただくなどして共有し、また各校に持ち帰って、実現可能なものについては、取り組むという普及の仕方を今、進めているところでございます。

○松本暁彦委員

続きまして、非認知能力のところですが、第五中学校区の実践についての中身も、よく分かりました。大変よい実践だと思います。ぜひ、進めていただきたい。コト・モノ体験、そういった第五中学校区の実践をやることによって、非認知能力の向上を図っていただきたい。

コト・モノ体験も含め、そういうことをするには、どうしても財政的な支援が必要かと思うんです。それについてはどう考えているのかお聞きします。

○松本学校教育課参事

非認知能力向上に資するコト・モノ体験への財政的支援についての御質問にお答えいたします。

学校教育課では、このような学校の実践を支援するために、学校マネジメント支援補助金という形で、学校が体験活動を行うために、出前授業を行うことや、校内研修会に講師を招聘することなどに活用できる予算を交付しているところでございます。非認知能力を育むために、子供たちの体験的学びの充実を一層進められるよう、今後も検討してまいりたいと考えております。以上です。

【質疑3：キャリア教育推進について】

○松本暁彦委員

3番目、キャリア教育推進事業です。これにつきましても、私がやる気スイッチ施策を提言してから、キャリア教育の推進につながって、今、当たり前のように進められており、大変評価をしております。

会派としては、小中一貫教育、9年を見通した教育が必要と提言をしております。その中で、代表質問の答弁でキャリアパスポートという言葉が出てきております。キャリアパスポートの重要性は認識をしております。改めて具体的な内容等についてお聞かせください。

○松本学校教育課参事

3番目、キャリア教育について、キャリアパスポートの具体的な内容についてでございます。こちらは、小学校から高校までのキャリア教育に関わる学習状況について、子供自身が記録をし、そして先生もコメントを書き、子供が自分自身の変容や成長を自己評価できるように工夫されたポートフォリオのことでございます。以上です。

○松本暁彦委員

続きまして、3番目です。キャリアパスポートの件です。自己評価について、小学校から高校まで持っていくもので、9年間、見通した教育の大きな手段になると思います。

キャリアパスポートで書かれたことを、我がこととして、さらに思うようになるには、人前で発表するというのも重要かと考えます。人前で話す力を養うことも生き抜く力には必要で、コミュニケーション力にもつながります。

また、人前で発表することで、一層真摯に子供たちは考え、また、他の子供の考えを聞き、お互いに切磋琢磨できます。いいこと尽くしだと思います。それについてどうお考えかお聞かせください。

○松本学校教育課参事

そして、3点目のキャリアパスポートの内容を発表することについての御質問にお答えいたします。こちらは、子供たち自身が夢や志を発表したり、仲間のそうした思いを聴くことにより、非常に触発される、よい取組かと思えます。キャリア教育の中で、自分たちが職種体験等で学んだことについて発表し、プレゼンし、共有するというような取組について、進めているところでございます。

このキャリアパスポートそのものにつきましては、自分自身の振り返りや成長を図る自己評価というもので、主な狙いとしては、自分自身との対話で進めていくものですから、即座にそれを発表する材料とするかどうかは別と

いたしまして、そういった夢や志を発表するというのは、非常によい取組かと認識しております。以上です。

○松本暁彦委員

続きまして、キャリア教育のところでは、ぜひ、自分たちの夢、キャリア教育の職業体験以外でも、自分のことをはっきりと言う場面は、ぜひ設けていただきたい。就職試験でも自分のことをしっかりとしゃべっていく。そこで恥ずかしがっていたら、就職はできないわけです。そういったところも、キャリア教育につながっていくと思います。

それは、我が会派の嶋野議員がよく言われる立志式が一つの形と思います。立志式という形にこだわらずとも、クラスの中で言うとか、様々な場面を通して発表する機会を提供することは、ぜひ、各学校においても進めていただきたい。キャリアパスポートを活用するという観点だと思いますので、よろしく願いいたします。

【質疑4：導入する英語オンライン教材と国語力向上について】

○松本暁彦委員

5番目、令和6年度当初予算主要事業一覧7ページ、オンライン教材です。中学校の各校へ普及していく考えを述べられました。普及に当たって、まず、どう評価をしていくのか。当然、学力という点で、英語の能力向上を図るということでよいのでしょうか。向上が見られなければ、また別のものを検討するのか、お聞かせください。

併せて、令和4年度のチャレンジテスト 全国学力・学習状況調査です。英語だけでなく、数学や国語も低い状況です。そこへの支援はどう考えているのか、お聞かせください。

○武田教育支援課長

5番目のお問いの前半部分、英語の学習ツールの評価をどうしていくのかという部分について御答弁申し上げます。結論から申し上げますと、学力テスト等の点数が、この英語学習ツールを使うことで直ちに上がるというところを評価の対象とはしておりません。もちろん、そうなってほしいという思いは持っておりますが、今回の導入を予定している英語学習ツールBASE in OSAKAには、児童・生徒の学習状況を学校や教育委員会が把握することができるようになっております。

例えば、新しい問題に何問チャレンジしたのか、あるいは一度Cと判定されたんですけれども、Aになろうと思って何回も繰り返し頑張った、そういった努力の評価がポイントとして表示されるシステムになっております。

先日の西谷委員の御質問の中でも触れましたが、留学生の交流とか、子供の意欲を高めるための取組であったり、モデル校で実施した授業の工夫、課題の出し方、そういったものと子供をたちの活用状況の変化を市内の英語担当の教職員で共有しながら、モデル校での取組が子供たちの学習意欲にどうつながっていったのかというのを評価していきたいと考えております。

○松本学校教育課参事

同じく、5番目のお問いの中に、数学、国語、英語についての取組をどうするのかということがございました。こちらにつきましても、先ほど御答弁いたしました授業の改善をもちろん推進してまいりますとともに、その内容といたしまして、子供たちが知りたい、聞きたい、学びたいと感じられるような教材作成等にも取り組んでまいります。

また、その授業の中への学習支援としては、先ほど来から出ております学習サポーター等の支援人材の活用もしてまいりまして、他の教科の支援もしてまいりたいと考えております。

○松本暁彦委員

5番目、オンライン教材、英語の導入についてです。単純に、すぐ英語の点数につながるものではないということです。結果につながることに、英語の意欲向上と、教員との連携につながっていくんだと理解をいたしました。

私も、英語に力を入れること自体は決して否定するものではないです。前回の決算、今回の予算も踏まえ、英語の教育支援について、予算が偏っている印象を受けます。あくまでも数字を出しているわけじゃないので、感覚的です。

英語は第二言語であって、第一言語は、日本語、国語です。チャレンジテストも学習状況調査を見ても、国語が一度も全国平均を上回っていない状況です。摂津市としては生きる力を育むということで、最も必要なのは、国語だと思っております。一般的に、国語力、例えば就職試験でもエントリーシートの書き方、面接でも、問われるのは、国語であって、国語力によって生涯年収の差がつくと思っております。バイリンガルの方は、よく英語脳があるとお聞きします。一般的な人は、英語を聞いて、頭の中で国語に変換して、そしてまた国語から英語に変換して口に出すという手法です。国語力を培っていないと、英語でのコミュニケーションもできない。できる方もいるかもしれませんが、大抵の人は、国語あつての、英語になってこようかと思っております。

まずは生きる力において、国語力を高めることが優先的に高いと思います。教育支援課は、教育総務部全体の方針、考え方と思います。教育支援活動も、ぜひ力を入れていただきたい。

これは河平副理事、もしくは部長に質問です。生きる力の中で、国語力をどう位置付けているのか、令和6年度、国語力は全国平均を上回るんだという意気込みを聞かせていただきたい。何も英語を否定するわけではなく、これ自体は結構かと思えます。しかし、生きる力を養う国語というところに、どこまで真摯に取り組んでいるのか、お聞きしたいので、よろしく願いいたします。

○河平教育総務部副理事

5番目の御質問の生きる力を育む中で、国語力の向上に対する意気込みについて御答弁申し上げます。国語については、対話力や読解力、語彙力、思考力もそうですけども、様々な力を育むことにつながって、全ての教科の基礎となるものと考えております。

その内容につきましては、学習指導要領の中にも言語活動の充実ということで示されておまして、言語というものは国語そのものでございます。その中で、本市におきましても、小学校でも多くの学校が国語の研究に取り組み、研究授業や研究発表等を行っているところです。

また、本市としましても令和4年度までに、国事業の「学力向上のための基盤づくりに関する調査研究事業」を受け、その中でも、魅力ある言語活動の充実について取り組んできました。その取組の内容については、読解力向

上を目的に取り組み、各学校に普及を努めてきたところでございます。中学校におきましても、教科の特性はいろいろありますけども、全ての学びの基礎となりますのは国語になりまして、やっぱり国語力を高めていくことは重要であると捉えております。

教育委員会といたしましては、これまで小学校で学んできたことなどを、中学校でも積み重ねていくことで、小・中学校が連携して、国語力を中心とした学力向上に取り組んでいきたいと思います。そのようなことを通して、子供たちがこの社会を生き抜く力が育めるように取り組んでまいりたいと考えております。以上です。

○村上英明委員長
安田部長。

○安田教育総務部長

私からも、少し答弁をさせていただきます。私も、令和5年度の文教上下水道常任委員会の皆様の視察に、同行させていただきました。東京都世田谷区で、教科「日本語」の授業を拝見させていただきました。そこで、子供たちが日本語に親しみ、国語についてしっかり考え、また、話すことに取り組んでいる姿を拝見させていただきました。

やはり国語・勉強だけでなく、話す力、コミュニケーション力も大事だと。これからの生きる力の基本となってきますので、我々教育委員会としても、その辺、しっかりと取り組んでいきたいと考えております。

○松本暁彦委員

続きまして、オンライン教材の件です。やはり、国語力だと思います。読解力がなければ、数学でも文章問題を解けない、理解についてもしかりです。そこについては、もっともっと、力を入れていただきたい。別に英語は否定するものでもなく、しっかりと進めていただいて結構ですけども、国語について、教育支援課としても、何かこれだというふうに、ぜひ検討していただきたい。

やっぱり全国平均から、チャレンジでも、全国学習状況調査でも、国語力が低いのは、一番の問題です。よく出口委員が言われるように、新聞で読解力を鍛えるとか、様々な手法を通じて、国語力を高めていただきたい。それで、全国平均を突破していただきたい。これも要望とさせていただきますので、よろしく願いいたします。